

目的 わが国の高齢化は、世界に例を見ない激しいスピードで進んでいるため、様々な場面で、現状と意識の間にギャップがみられる。特に生活の基礎単位である家庭において、高齢社会における役割期待は混乱している。つまり、家族養育に関しては、「家」を基盤とした家族養育観と、「個」を単位としたそれとが混在しているように思われる。高齢社会の総合生活システムの形成を序之に於いて、こうした意識の現状を把握すること为本報の目的である。

方法 わが国で実施された高齢社会を展望した「家族養育観」に関連する意識調査を概観し、上記目的に接近する。

結果 「家族養育観」に関する意識調査の内容は、大きく3つの領域に分けられる。それは経済的養育、精神的養育(支え)、生活介護である。①経済的養育については、世帯の経済基盤の変化、年金制度の成熟化傾向のため、全体的にみて自立志向が強い。②生活介護については、現状は女性(妻、息子の妻、娘)が主に担っていることは周知のとおりである。今後の担い手に誰を希望するならば、家族・家族以外双方について、男女別、年齢別、地域別、家族類型別に、大きな差がみられることわかれる。③とほいいうものの、精神的支えについては期待度は高く、その条件整備が社会システム(①、②も含めて)として行うことの重要性が判明した。また④調査自体に変化がみられた。たとえば、介護希望者の選択肢で「嫁」と表現せず「息子の妻」という用語を使用するようになった調査もあり、意識調査自体の問題意識も変容している。